

チータムズ・ライブラリー

～マンチェスターにおける民衆史観光の語りをめぐる～

大谷裕文

はじめに

1990年代の初め頃から、新たなテーマの追求と結びついた新たな旅行カテゴリーが現れるようになった。このような新旅行カテゴリーの中に、文化観光(cultural tourism)と呼ばれるジャンルが含まれていた¹⁾。

文化観光の中でも、遺産観光、先住民文化観光、フェスティバル観光、都市文化観光などは既に確立された旅行形態として近年成長が目覚ましい文化観光セクター全体の牽引力となっているが、ポピュラー・カルチャー観光、オルタナティブ芸術観光、労働者文化観光、ゲイ文化観光、民衆史観光などは、非常にマイナーな観光形態であり、観光研究の中でも「見落とされる」ことが多かった²⁾。本研究は、顧みられることの少なかった、文化観光のマイナーな形態の中でも、特にターゲットを産業革命の中心都市であった英国マンチェスターの19世紀民衆史観光に絞り、チータムズ・ライブラリーでの経験に基づいて、近年静かなブームとなっている19世紀民衆史観光の実情、そのアクチュアルな政治・経済的背景、および19世紀民衆史に関する人為的に構築された「語り」が、「政治的な言説」としてそのような語りを求めてやって来た観光客をどのようにインスパイアし、そしてモビライズしているのかの一端を明らかにすることをその目的としている。さらに、マンチェスター観光の一大中心となっているマンチェスター・ユナイテッド博物館およびスタジアムの徹底的に商品化されたツアーと比較して、チータムズ・ライブラリーのツアーが、その

対極の性質，すなわち資本蓄積を相対化する顕著な革新的志向性を有していることを論証したい。

チータムズ・ライブラリーには，2013年3月下旬にオーソドックスな民衆史関連の史料調査の目的をもって行ったのであるが，史料調査中に偶然，観光目的でチータムズ・ライブラリーを訪れた英国L市とS市の生活協同組合主催の団体旅行に出くわし，この2つの団体の観光テーマが民衆史であることを知って，急遽これらの団体旅行に一時的に加わることを認めて頂いた結果，多くの事柄を知ることができた。また，チータムズ・ライブラリーでは，司書M氏に細かな質問を行い，大変ご面倒をおかけしたと思うが，M氏は煩を厭わずこれらの質問に丁寧に答えて下さった^④。本稿の記述と分析の多くは，以上の経験を通して得られた情報に依拠している。

1. チータムズ・ライブラリーの来歴

M氏によれば，チータムズ・ライブラリーは，市民に広く開かれた無料公共図書館として実に360年間に亘って重要な役割を果たしてきたのであるが，21世紀に入って「文化観光」の人气が急速に高まる中，今やマンチェスターにおけるニッチではあるが定評のある「観光地」の1つとなっている。同館を訪れる観光客は，主に，イギリス各地の生活協同組合のメンバーや歴史研究クラブの会員などの団体旅行客が多く，年齢層はシニアクラスに偏っている。以下は，チータムズ・ライブラリーの来歴に関して，L市生活協同組合団体旅行のツアーガイドが，淀みなく諄々と話して聞かせてくれた「語り」である。

マンチェスターは，古代ローマ時代以来，戦略的に重要な場所でしたが，この街を貫流する2つの主要な河川，アーウェル川とアーク川の合流部は，とりわけ重要な要衝の地でありました。チータムズ・ライブラリーのユニークな雰囲気を作り出しているこの印象深い赤い砂岩の建造物は，マンチェスターの領主であり教区教会牧師でもあったトーマス・デ・ラ・ウォーによって，学寮長つ

まり彼自身、十数名の参事と事務員、それから数名の合唱隊員を有するカレッジとして教会を再設立する許可をヘンリー5世から取得した後に、1421年に築造されたものです。実は、デ・ラ・ウォーは、彼自身の邸宅をこの場所に所有しておりましたが、それを取り壊して、大きな新建築物を建てたのです。この建物は、現在のマンチェスター中心部から約1.5マイル北西に行ったところに位置するコリーハーストという処で採石され、川のはしけでこの場所に運搬された地元の砂岩で建てられております。様式的には、前景に防衛門を有する建物が中央の中庭を中心に整然と配置される典型的な中世様式建築物です。カレッジ内のゆったりとした空間には、大きなホール、学寮長自身のパーソナルな居住空間、各聖職者の部屋などが含まれておりました。さらに、パン焼き場、醸造所、厩舎、客室、および図書室など、その他の十分なカレッジ内諸施設を備えていました。純粋な教会を除けば、この石造建築物は、中世マンチェスターで最大の建造物であり、イギリス北西部に現存する中世建築物の中で最も完全なもの1つであると言えるでしょう。

しかしながら、1547年に、カレッジは解散してしまいました。そして、スタンリー家が、その莫大な資産を都市別宅として獲得したのです。カレッジは、その後再設立され、再度閉鎖され、また開設されるという曲折を経ていきました。その中で、徐々に荒れ果てていったのです。このような荒廃に終止符を打ったのが、ハンフリー・チータムという名の救世主だったのです。ハンフリー・チータム卿は、1580年にマンチェスターに生まれ、1653年に同地で亡くなった織物商人でしたが、ロンドンで仕入れた各種織物を北イングランドで手広く売る商いで大成功を収めた結果、クレイトン・ホールやタートン・タワーといった著名で由緒あるマナーハウスを購入するに至った富豪でした。しかしながら、彼は単なる一般的な意味での豪商ではありませんでした。というのは、彼は自らの巨万の富を、身寄りのない子供あるいは貧窮している家庭の子供を受け入れて無償教育を施す慈善学校および万民が無料で利用できる公共図書館の開設のために使うことを決心したからです。このようにして、1653年、ハンフリー・チータム卿が亡くなった年に、その遺言に基づいて、チータムズ・ホス

ピタルが開設され、約40名の恵まれない子供を受け入れました。さらに同年、公衆の利用に供することを目的としてチータムズ・ライブラリーも開設されました。

開設以来、チータムズ・ライブラリーは、無料で民衆の利用に供するサービスを提供すること、司書は民衆のために誠心誠意尽くすことという、ハンフリー・チータム卿の遺言を遵守して今日まで360年間に亘って大学図書館と競い合いながら図書館運営を行ってきた結果、本館は英語圏で世界最古の公共図書館であるばかりではなく、1850年以前のきわめてレアな書籍、定期刊行物、学会誌、郷土史料、チラシ、およびポスターや切手などの印刷物のオリジナルを多数所蔵する稀少書図書館の地位を得るに至りました。360年間の間に、きわめて多くの人々がチータムズ・ライブラリーを利用いたしましたが、その中に、ベンジャミン・フランクリン、カール・マルクス、フリードリッヒ・エ



写真1 チータムズ・ライブラリー遠景



写真2 チータムズ・ホスピタル遠景



写真3 チータムズ・ライブラリー書庫

ンゲルスなど、民衆史の発展に対する顕著な貢献を行った著名な人物が含まれていることを、チータムズ・ライブラリーは特に誇りとしています。また、チータムズ・ホスピタルの在籍者の中に後にロバート・オーウェン思想を継承しオーウェンナイトのリーダーとして活躍した人物がいたこと、さらに、マンチェスターの民衆史において特筆に値する出来事であった「ピータールー事件」関係のオリジナル資料を多数所蔵していることも、等しく誇りとしています。それでは、これからいま述べました顕著な人物あるいは出来事に所縁のある本物の民衆史遺産にご案内いたします。

以上が、L市の生活協同組合主催団体旅行ツアーガイドの語り⁽⁴⁾であるが、事後的にマンチェスターの郷土史関係の書籍や史料と対照した結果、事実関係に関しては正確であることが明らかとなった。しかしながら、「民衆史の発展に対する顕著な貢献」や「本物の民衆史遺産」などのフレーズは、この団体旅行のメンバーの志向性を踏まえた上で人為的に構築された表象であることは明らかであろう。その構築性こそが、チータムズ・ライブラリーを目的地とする「文化観光」あるいは「遺産観光」のもつ意味とこれらの意味が来客をモビライズする方向性を理解する上できわめて重要であると言えるが、この問題をより詳しく理解する為に、ガイドが言及し粹付けている「顕著な人物あるいは出来事」とチータムズ・ライブラリーとの関係を、「史实的」、「ナラティブ的」、かつ「分析的」に述べていくことにしたい。

2. 民衆史とチータムズ・ライブラリー～ベンジャミン・フランクリン

M氏によれば、アメリカ合衆国建国の父の1人であるベンジャミン・フランクリンは、1771年の5月にチータムズ・ホスピタルとチータムズ・ライブラリーを訪れ、チータムズ・ホスピタルでは恵まれない子供達を激励し、チータムズ・ライブラリーではその蔵書の素晴らしさと建物の重厚さを賛美したという。フランクリンは、1757年からアメリカ革命勃発前夜の1775年まで、一時帰国の期間を除いて合衆国大使として16年間もイギリスに滞在し、この間ほとんど

どロンドンのクレイヴン・ストリート36番地にあったフランクリン邸を生活の本拠地に使っていた。あまりにも長くイギリスに住んでいたために、合衆国に帰ると、「イギリス人」と見なされ、イギリスの「自宅」に戻るとアメリカ人として扱われるほどであったという。そのような意味で、ロンドンのフランクリン邸は、アメリカとイギリスを繋ぐ実質的な合衆国大使館であるとともに、フランクリンの、当時としては革命的な民主主義哲学を熟成させ、帰国後の革命に向けての準備を整えさせてくれた空間でもあった⁵⁾。

上述したイギリス滞在16年間に、フランクリンは広くイギリス・アイルランドを旅しているが、1771年の5月には、2週間に亘るバーミンガム、シェフィールド、リーズなどを巡る英国ミッドランドを巡る旅を行っているため、この旅の一環として、チータムズ・ライブラリーを訪問したことは間違いないであろう。しかしながら、チータムズ・ライブラリーとチータムズ・ホスピタルをフランクリンがわざわざ訪問した正確な理由は、残念ながらよく分かっていない。しかし、その理由を推測することはできるという。それは、フランクリンが、マンチェスターの啓蒙思想家であり、世界に先駆けて医療倫理学と公衆衛生学の重要性を説く医師でもあったトーマス・パーシバル (Thomas Percival) と頻繁に文通していることから判断して、フランクリンがマンチェスターに来た最も重要な目的はパーシバルと会って、医療倫理学、公衆衛生学および都市センサス調査法などについて最新の知識を学ぶことであった可能性が高いという⁶⁾。フランクリンは、青年時代に、「図書館会社」の経営に実際に携わったことがあり、ペンシルベニアに移ってからより優れた公立図書館を建設する計画に関心を持ち続けた人物であるので、マンチェスター滞在の折に、ついでにチータムズ・ライブラリーの「見学」あるいは「視察」を行ったというのが事の真相であろう。

フランクリンと同様に、「先進的知識人」ではあるが、来館の目的がよく分からないチータムズ・ライブラリーの利用者としては、『ロビンソン・クルーソー』のダニエル・デフォー (Daniel Defoe)、信仰覚醒を唱えるラディカルなメソヂスト運動で有名なジョン・ウェスレー (John Wesley)、原子説を提唱

した著名な物理学者・化学者であるジョン・ドルトン（John Dalton）などがあるという。

3. 民衆史とチータムズ・ライブラリー～ラッドライト運動

ラッドライト運動は、「大将」と呼ばれていたネッド・ラッド（General Ned Ludd）と彼をリーダーとして尊敬する「リドレッサー〈Redresser〉」と呼ばれるノッティンガムの労働者集団が、減給および熟練労働者の未熟練労働者による置き換えを伝える工場主の通告に激怒した結果、1811年初めにこの町で開始したラディカルな織物工場機械破壊運動である。その結果、打ち壊し開始から3週間の間に、200以上の靴下編み機が破壊されたという。1811年3月に入ると、攻撃は毎晩行われるようになり、ノッティンガム当局は工場を守るために約400人の特別な巡査を投入しなければならなくなった。さらにジョージ3世を補佐する摂政（後のジョージ4世）は、容疑者検挙を進めるために、「悪意」をもって機械を打ち壊した人間に関する情報を提供した者に、50ポンドを提供する旨の公告を行った。しかしながら、ラッド思想（Luddism）は、ヨークシャー、ランカシャー、レスターシャー、およびダービーシャーへとさらに拡大していった。1812年に入っても、ハッダースフィールド、ハリファックス、ウェイクフィールド、リーズなどの工場が連続的に襲われた。このような状況に対して、英国政府は、1812年2月に機械打ち壊しが死罪に相当する重罪であることを規定した法案を提出し、後にこの法案は成立した。ラッドライトへの更なる警告として、北部イングランドに約12000名の軍隊も投入された。こういった厳戒態勢の中においてさえも、なおラッドライトの活動は続いた。1812年は、旧来の手織機職人と力織機業者の対立が先鋭化した年である。同年3月20日、ストックポートで力織機を最初に導入したウイリアム・ラドクリフの倉庫が攻撃された。同年はまた、クロッパー（croppers）と呼ばれる少数精鋭の熟練織布労働者と動力織物仕上げ機（shearing frame）を新たに導入する業者の闘争が激化した年でもある。クロッパーは、怒りの矛先を動力織物仕上げ機を稼

働させている業者に向け、その打ち壊しを始めた。1812年4月、ヨークシャーのブリッグハウスの近くにおいて、クロッパーの精鋭集団が、織物仕上げ機を導入して大規模な経営を行っていたウイリアム・カートライトの工場（Rawfolds Mill）を攻撃した。この攻撃は、最も激しい部類のものであったが、カートライトが「襲撃」を予期して、「十分な防備」を固めていたために、数名のクロッパーが銃撃で瀕死の重傷を負い、残りは逃走するという結果に終わった。しかしながら、その1週間後にラッドライトは、近くのウイリアム・ホスフォールの大工場を攻撃し、工場主が殺害された。この事件後、当局によって懸命の捜査が行われた後、約60名が検挙され、そのうち3名が処刑されたという。同年4月20日、数千人のラッドライトがマンチェスターの近くのミドルトンにおいてエマニュエル・バートの工場を攻撃した。バートンは、力織機の導入が地元の手織機職人を激怒させたことを知っていたので、武装した警備員を配置していた。その結果、数名のラッドライトが銃殺されることになった。この事件の翌日、ラッドライト達は、エマニュエル・バートの家に行き、彼の家を全焼させた。この事件の報を受けて、軍が到着し、7人のラッドライトが殺害された。さらにこの事件の3日後、マンチェスターの近くのウエストホートンにあるレイとダंकロフの工場に火が放たれ、同工場は全焼した。さらにまた1812年は、労働者家族の生活が成り立たなくなるほどに小麦価格が暴騰した年でもあった。その結果、絶望に陥ったラッドライトの中には直接行動に訴える者も出て、オールダム、アシュトン、ロッチデール、ストックポート、マックルズフィールド、リーズ、マンチェスターなどの都市では、食糧暴動が頻発した。しかしながら、以上のようなラッドライトの激しい運動も、その後散発的に再燃しながらも徐々に衰微して行き、1817年には収束することとなった。

上述したラッドライト運動に関連する史料や文献をチータムズ・ライブラリーは、多数収蔵しており、そのことを誇りとしている。さらに、チータムズ・ライブラリーとラッドライト運動を結びつける語りの中心に、ジェームズ・テイラー・ステイション（1817年～1875年）という1人のジャーナリストが位置している。ジェームズ・テイラー・ステイションは、家庭が貧しかったために、

1826年から1831年までチータムズ・ホスピタルに引き取られた。ステイションは、そこで成績も良く品行も方正であったので、チータムズ理事長の及びチータムズ・ホスピタル校長の世話係 (servant) を命じられていたという。チータムズ・ホスピタルを去ってからは、マンチェスター郊外ボルトンの印刷工であったロバート・ホールデンの元に弟子入りし徒弟として働いた。やがて、ステイションは自立し、印刷工、出版者、編集者、ジャーナリスト、作家として目覚ましい活躍をするようになる。作家としては、ランカシャー方言を使ってボビー・シャットル (Bobby Shuttle) という定型キャラクターが読者の期待に応じて大活躍をする冒険物語を書いたり、マンチェスターの出版社経営者ジョン・ヘイウッド (John Heywood) の援助によって、この地方の方言によって書かれたユーモア溢れるコミック語り物集 (comic recitation) を出版して人気を博した。ジャーナリストとしては、ティロストン家 (Tillotson family) と提携して、同家が発行する有力新聞、ボルトン・イーヴニング・ニュース (Bolton Evening News) の副編集長として健筆を振るったり、鋭い批判意識からラッドライト運動を再調査してその成果を一連の記事として世間に問うたりした。このラッドライト運動関係の記事の中でも、上述したウエストホートのレイ／ダंकロフ工場襲撃事件の再調査は綿密であり、その社会的意味の再解釈が、ステイションの記事の読者に大きなインスピレーションを与えたという。

4. 民衆史とチータムズ・ライブラリー～ピータールー・マサカー

ラッドライト運動の収束から間もなくして、マンチェスターでは、普通選挙権 (universal suffrage) を求める運動が勢いを増して行き、1819年3月、ジョゼフ・ジョンソン (Joseph Johnson)、ジョン・ナイト (John Knight)、ジェームズ・ロー (James Wroe) などの急進主義的改革者が、マンチェスター・パトリオティック・ユニオン・ソサイエティ (the Manchester Patriotic Union Society) を設立し、ジョゼフ・ジョンソンが同協会の代表に、そしてジェームズ・ローが、書記に選出された。同協会は、普通選挙権獲得に向けての運動を進めるた

めに、同年8月にヘンリー・オレイター・ハント（Henry Orator Hunt）やリチャード・カーライル（Richard Carlile）など、当時カリスマ的な影響力を持っていた社会改革運動家を招いて大政治集会を開催する計画を立てた。人口が数百名に激減しているにも関わらず、数名の下院議員を送り出している村落部の選挙区もあれば、産業革命の進展の中で人口集中が急激に進むマンチェスターのような北イングランドの大工業都市の多くが1名も代表を送り出すことができないという矛盾した実情を政治集会の開催によって速やかに変革したいというのが、マンチェスター・パトリオティック・ユニオン・ソサイエティの悲願であった⁸⁾。この計画は順調に進捗し、1819年8月16日、セント・ピーターズ・フィールドで同政治集会は開催された。しかしながら、この6万人以上が参加した集会は、オープニングからほどなくして、イギリス史上最大級の犠牲者を出す悲劇に転じたのである。

マンチェスターの行政長官（magistrate）は、数万人の大群衆が参加すると見込まれる政治集会が突然大暴動に進展することを心配していたので、マンチェスター特別治安警察（約400名）、マンチェスター・サルフォード義勇騎兵隊（数十名）、チェーシャー義勇騎兵隊（数百名）の他に、第15軽騎兵隊6大隊（約600名）、歩兵数百名、6ポンド砲2砲装備英国騎馬砲兵隊分遣隊からなる万全の軍勢力も予め用意して、万一の事態の発生に備えていた。しかし、同日午後1時過ぎにヘンリー・オレイター・ハント、リチャード・カーライル、ジョン・ナイト（John Knight）、ジョゼフ・ジョンソン（Joseph Johnson）、それから初期のフェミニストとして有名なメアリー・フィルズ（Mary Fildes）などのメイン・スピーカーが到着した直後に、同行政長官は変心し、演説を始めた後に大群衆の前でオレイター・ハントを始めとする「首謀者」を逮捕することが「見せしめ効果」を生むと考え、作戦を大きく転換することにしたという⁹⁾。次に、この悲劇のアクチュアルな状況を知るために、当時、主催者マンチェスター・パトリオティック・ユニオン・ソサイエティの幹部の1人として演壇の近くに陣取り、同時にまたマンチェスター・オブザーバー紙のジャーナリストとして取材も行っていたジェームズ・ロー（James Wroe）の記事（James

Wroe, 1819, *The Manchester Observer*, 21st August, 1819) を見てみよう。ジェームズ・ローは、また、この悲劇をナポレオンとの闘い、ウォータールーに因んで、ピータールー・マサカーと名付けた最初の人物である。

16日の朝は、何千人もの人々によって喜びをもって迎えられた。人々の気持ちはその集会に強く駆り立てられていた。朝早くから人々は、私たちの歴史年鑑に記録された中で英国人にとって最も大きくかつ最も喜ばしい集会を目撃せんがために、国の様々なそして遠方の地域から押し寄せてきた。ボルトン、オルダム、ストックポート、ミドルトンなど周囲の全ての地域から。リーズ、シェフィールド、もっと遠方の町からも、何千人もの支持者が、神聖な自由の神殿へやってきた。愛国主義者ハント氏と彼の友人たちが演壇上の持ち場についていた。15万もの人々が、セイントピーター教会の近くのその地域に集まっていた。ハント氏は、およそ午後1時半頃、演壇に登り、少し準備をした後、政府に対して平和と秩序を求めつつ、莫大な数の人々に語りかけ始めた。この間、混乱発生の様子あるいはそれが起こりそうな気配もなかったが、何の予告もなく突然、歩兵の列が集会の始まりを占拠する様を見て我々は驚いた。その場へ駆け寄り、作戦態勢を取り始めたマンチェスター・サルフォード義勇騎兵隊の出現によって、私たちの恐れは強まり恐怖に転じていった。彼らは、また、地獄の目的遂行を大きく遅らせることはなかった。特別治安警察も持ち場から呼び寄せられた。軍隊らっぱが攻撃命令を発した。その後は、殺人・虐殺シーンの連続である。後代の人はそのを信じるのをためらうことだろう。そしてそれは、この惨く血に塗られた悲劇の作者と賛助者を驚愕する世界へと引き渡していこう。男、女、子供、老若男女を問わず、これらの怪物の犠牲となってしまった。かくも気ままに冷酷に引き起こされた生命と手足の損失の程度を、私たちが確かめることは不可能である。人々は、第15軽騎兵分遣隊によってサポートされた、これらの気のふれた暗殺者を回避するために四方八方に逃げていった。しかしながら、後者は、私たち町民と同じリベラルな手をもって、死と傷を与えたのではなかったである。

以上のジェームズ・ローの記事は、惨劇の直後の生々しい状況を伝えているが、次に引用するアーチボルト・プレントイス (Archibald Prentice)⁽¹⁰⁾の記事は数十年後の回想である。このプレントイスの記述は、別のアングルから同じ出来事を見るとどのように見えるのか、例えば女性の参加者がかなり多く、彼女たちの明るい衣服がオープニング前の雰囲気盛り上げていた点、また彼女たちは当初少しも恐怖感を抱いていなかった点、多数の旗がページントの絵のような美しい効果を上げていた点、直前の行政長官の怖じ気づいた態度と参加者への攻撃が土壇場での決定であったことを伝えている点、事後に明らかになった集会参加者の総数が15万ではなく約6万5千であったことを伝えている点、および、ヨーマンリーと呼ばれていたマンチェスター義勇騎兵隊が、主に、急進主義に対して激しい憎悪をもつ短気な青年から構成されていたことを伝えている点などにおいて、ジェームズ・ローの記事を補完する有用性を有している。

8月16日の朝は来た、そして、9時過ぎに、人々は、集合し始めた。モースリー通りのバクスターさんの家の窓から、私は、人々の大きな流れがセントピーターズ・フィールドに向かって続いているのを見て、こんな快活な光景はこれまで見たことがないと思った。確かに、やつれているように見える男もいた。しかし、大多数は、日曜日の晴れ着を着た若者であり、上機嫌の多くの女性たちの明るい色のドレスが男性が着ているファスチアン織りの暗色を効果的に軽減していた。そのような「隊列」(後にしばしばそう呼ばれるようになったのであるが)は、今日、私たちが日曜学校の子供や節酒会の人々の列でしばしば見るものである。私たちの目には、多数の旗は、ページントの絵のように美しい効果を加えるために持って来られたかのように見えた。ゆっくりと規則正しく、多くの人々は演壇の周りに席を取り始めた。それは、現在のフリートレード・ホール東南角地近くの屋根下の場所に当たる。我々は、行政長官の怖じ気づいた態度を笑った。そして彼の警告は、もし人々がよからぬ事を企んでいるならば、彼らは二度と妻や姉妹、子供を連れてくる事はできないであら

うということであった。私は集会場の周りを歩いて回り、そこでお喋りをして
いた人々と交わった。そして折に触れて女性たちに、ここにいることは怖くは
ないですかと尋ねた。彼女たちはいつも笑いながら答えた。いったい何を恐れ
なければならないのよと。私はハントが到着するのを目撃した。そして、約6
万5千人の人々が歓声を上げるのを聞いた。ハントは人々によって熱狂的に迎
え入れられた。彼が立ち乗りしている馬車は、立錐の余地もない聴衆の間を縫っ
て、演壇のほうに向かっていった。私は、1時間かそこいらで戻ろうと思って、
サルフォードの家に向かって歩き出した。これほど大きな集会在どのようにし
て解散するのか見届けたいと思ったのである。ところが、家に15分もいないう
ちに、通りの方から人々の泣きわめく声が聞こえてきた。私は飛び出した。人々
が、ブルトンのほうに向かって走って逃げているのを見た。人々の顔は死人の
ように青白かった。頬から鮮血を滴らせている者もいた。やっとの思いで私は
人を止め、何が起こったのかを聞いた。非武装の男、女、子供など多数の人々
が軍隊に攻撃され、その結果虐殺の事態に至ったのだという。土壇場になって
行政長官は決断したのだ。ハントと演壇の周りに付き添っている彼の友人達を
聴衆の面前で逮捕すべきであると。それは非常に大きな集会であった。彼らが
6万人の大群衆の前で首謀者を逮捕することが良い結果を生み出すと考えてい
たのは明らかである。抵抗を諦めさせるに十分なだけの警備力が展開されてい
た。特別治安警察の数もどんどん増えていった。さらに200人はその場に備え
て待機状態にあった。1部隊は演壇のまわりに配置され、別の部隊は100ヤード
離れたところにある行政長官が待機している家のほうに向かって指揮命令系
統を作りだしていた。その現場近くには、要請があり次第即行動できるように、
第15軽騎兵などの6部隊、2つの砲を装備した英国騎馬砲兵隊、歩兵31連隊の
大部分、88連隊の一部、200名から300名のチェーシャー義勇騎兵隊、40名のマ
ンチェスター義勇騎兵隊が待機していた。マンチェスター義勇騎兵隊は、短気
な青年ばかりであり、急進主義に関する彼らの激しい憎悪からそのサービスを
ボランティアとして買って出た者たちである。

2007年のマンチェスターで再びピータールー・マサカーへの関心が高まった。188年後に、「歴史上ピータールー・マサカーとして知られている一瞬の無差別暴力事件への顕著で正確かつ敬意に満ちた」メモリアルを求めるキャンペーンが広がりを見せている事実を、ガーディアン紙のマーティン・ウェインライト北部編集長（Martin Wainwright）が、「ピータールーの記念をめぐる闘い～運動家は相応しい記念物を要求」と題する記事⁽¹¹⁾で報道したことがその端緒であった。同編集長は、これまでのピータールー・マサカー関係の記念物としては、現場に近いラディソン・エドワーディアン・ホテルの壁面に取り付けられた、「地味で真理の半面だけしか語らない」⁽¹²⁾小さなブルー・ブラックがあるのみである現状を批判し、民主主義の歴史において本事件が占める重要性に相応しい記念物が必要であることを主張し、さらに、ピータールー・マサカーは今日でも触れたくないマンチェスターの恥辱であるとする保守的な人々が少なくない中で、「最近、チャーチストの記念碑の除幕式を行ったハイドの町の人々に遅れを取りたくない」という町の人の意見を紹介し、新記念物創出の気運が確実に高まっていることを強調している。

このような気運の高まりの中で、最終的には古いブルー・ブラックを撤去し、研究結果を反映した新しいレッド・ブラックを取り付けることが決議された。現在、そのレッド・ブラックは、ラディソン・エドワーディアン・ホテルのブルー・ブラックがあった場所に取り付けられているが、それには「1819年8月16日、男、女、子供など、民主派改革者6万人の平和な大集会が、武装騎馬隊に襲撃され、死者15名、負傷者600名を出す結果となった」と書かれている。先の観光ガイド氏は、「真の民衆史への執着が、それを隠蔽しようとする悪しき企みを挫いたのです」と語っていた。レッド・ブラックの創出を促進した駆動力の中心が、ガーディアン紙であるという点も歴史の因果を思い起こさせて興味深い。というのは、ガーディアン紙は、ピータールー・マサカーの概要をロンドン・タイムズ紙の記事として他に先駆けて最初に報道したジョン・エドワード・テイラー（John Edward Taylor）が、この事件のインパクトを強く受けたことによって、1821年に創刊を決意した「マンチェスター・ガーディアン



写真5 チータムズ・ライブラリー・ピータールー画報



写真6 ピータールー・マサカー・レッド・ブラック

付録ともに、ピータールー・マサカー事件の真相を知る上で不可欠の資料あるいは史料となっている。他にも、ピータールー・マサカーに関連する人気のあるポスターやパンフレットが多数あるという。また質問者の増大と共に、観光ガイドのピータールー・マサカーの語りも年ごとに豊かになっているようだという。

5. 民衆史とチータムズ・ライブラリー～オーウェナイトと チャーチスト運動

ロバート・オーウェン（1771～1858）は、1788年に、マンチェスターにやって来て、1799年に、スコットランドにおける綿紡績業の大立者デイビッド・デイルの娘と結婚し、共同経営者として彼のニュー・ラナーク紡績工場に移るまで、約12年間をマンチェスターで過ごした。マンチェスターにおいて、ロバート・オーウェンは、当時普及し始めたばかりの最新型蒸気機関駆動ミュール紡績機を同地で最初に導入して最大規模の細糸紡績業を展開していたピーター・ドリングウォーターのピカデリー・バンク・トップ工場の管理者として雇用され、そこで紡績工場経営者になるための才覚と資力の基礎を形成していった⁽¹³⁾。この間、ロバート・オーウェンは、世界最古の文芸哲学協会として知られるマンチェスター文芸哲学協会の会員に選出され、医療倫理の提唱者として有名なトーマス・パーシバル、化学者・物理学者のジョン・ドルトンなどの会員と共に改革思想や啓蒙哲学を論じ合うためにユニタリアン系のクロス・ストリート・チャペルに通った。また、ロバート・オーウェンは、1796年にトーマス・パーシバルが工場内およびスラム地区の劣悪な衛生状態を調査・監視する為の任意団体として設立したマンチェスター衛生委員会（Manchester Board of Health）にも加入し、ブリッジウォーター・アームズ・インで開催されるこの委員会の会議にも参加していた⁽¹⁴⁾。上述したクロス・ストリート・チャペルやブリッジウォーター・アームズ・インは、チータムズ・ライブラリーに近接しているので、知的探求心の旺盛なロバート・オーウェン自身も何度かチータム



写真7 ロバート・オーウエンの銅像（マンチェスター・バルーン・ストリート）

ズ・ライブラリーを利用したと思われるが、残念ながらその確たる証拠はないようである。

ロバート・オーウエンの名とチータムズ・ライブラリーを結びつける観光表象は、チータムズ・スクールに在籍していた、ある1人のオーウェナイトの「発見」によってもたらされることになった。先に紹介したガイドの語りの中で言及されていたように、チータムズ・ホスピタルの在籍者の中に、後にロバート・オーウエンの思想に強く感化されてオーウェナイトのリーダーとなった人物がいた。そのオーウェナイトは、1817年にアイルランドで生まれたジョン・ベントという人物であり、1825年にチータムズ・ホスピタルに受け入れられ、約6年間の教育を受けた後、1830年にガラス着色職人の徒弟となるために巣立っていったという。その後、マンチェスターから10マイル北北東に離れているロッチデールという小さな町に移り、腕の良い仕立屋となった。彼は、ロッチデールの多くの住民が、産業革命が急速に進展する苛酷な1840年代（い

いわゆるハングリー・フォーティーズ〈Hungry Forties〉に綿紡績工場などの工場において長時間労働と低賃金を強いられたり、突然の解雇を言い渡されたり、チョークの粉を混ぜた小麦粉等の不良品を高い価格で購入させられたりする状況を目撃する中で筋金入りのオーウェナイトになっていった。やがて、彼は、こういった民衆の窮状を打開する話し合いの場に加わることになり、28名のオリジナル・パイオニア⁽¹⁵⁾の1人として、ロッチデール公正パイオニア組合（Rochdale society of Equitable Pioneers）を1人£1合計£28の出資金で1844年10月24日に立ち上げた。ロッチデール公正パイオニア組合は、28名のパイオニア各自が公正かつ自立した個人として組合（アソシエーション）の運営に関わるとともに、剰余金が生じた場合、組合員に配当金を分配することを世界で初めて定めた基本原則（後に世界の多くの生活協同組合がお手本として踏襲することになった有名なロッチデール原則〈Rochdale Principles〉）を有する画期的な消費協同組合であった。ジョン・ベントは、この配当金分配に責任を持つ組合会計監査として活躍するとともに、チータムズ・ホスピタル時代に得意科目であったと言われている算数の学力を活かして毎週日曜日に開かれる成人算数教室の教師としても尽力した。ジョン・ベントを語る上で、忘れてはならないのは、1840年代を通して力強い展開を見せたチャーチスト運動への関わりである。チャーチスト運動は、成年男子普通選挙権・無記名投票・議員財産資格廃止・議員有給制・毎年選挙・平等選挙区制の6か条の人民憲章（People's Charter）を掲げて、主に1830年代と40年代に労働者階級がオーウェン思想などで武装した上で推進した、より組織的な民主化運動であり、ピータールーと直接的な歴史的接合性を有している。ロッチデール公正パイオニア組合のメンバーの多くが、同時にチャーチストでもあったのであるが、ジョン・ベントも、この時期、ロッチデール地域のチャーチストとして重要な貢献をおこなったという⁽¹⁶⁾。ベントは、さらにその後、協同組合仕立て部門の理事を務めたあと、1894年に生き残っている組合員に惜しまれながら他界し、多くのパイオニアが眠るロッチデール・セメトリーに埋葬された⁽¹⁷⁾。



写真8 ロッチデール・パイオニア組合店舗遠景



写真9 ロッチデール・パイオニア組合オフィス銅板



写真10 ロッチデール・パイオニア組合店舗の様子



写真11 ジョン・ベントとロッチデール・パイオニアたち
(ジョン・ベントは、前列の左から2人目)

6. 民衆史とチータムズ・ライブラリー～カール・マルクスと フリードリッヒ・エンゲルス

チータムズ・ライブラリー・ツアーで最も人気がある観光対象は、実はカール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスが、協働作業をおこなったリーディング・ルーム内のアルコーブ (alcove) とそこに設置されている長方形のデスクであり、この「マルクスのデスク」と呼ばれている「お宝」に関しては来館者の質問が集中しすぎて答えるのが大変な状況であるという⁽¹⁸⁾。M氏によると、マルクスが大英博物館図書室に通っていたことはよく知られているが、実はそれよりもはるか以前の1845年夏に、マルクスとエンゲルスは、ここで協働作業を行ったという。尤も、エンゲルスがそれ以前に文献調査の為にチータムズ・ライブラリーを利用していただけの可能性はかなり高いと思われる。なぜならば、1842年から1844年まで、エンゲルスは、父親が共同出資者として経営していた「アーメン・アンド・エンゲルス社 (Ermen and Engels)」のサルフォード工場とマンチェスター市内のオフィスの双方で働きながら、恋に落ちた結果共同生活を行うことになったメアリー・バーンズというアイルランド系女性労働者の案内で⁽¹⁹⁾、余暇を利用してマンチェスターにおける労働者の職場環境および生活環境の調査をおこなうとともに⁽²⁰⁾、産業革命期の資本制生産様式に内在的な労働者の窮状を描き出した『英国における労働者階級の状態 (Die Lage der arbeitenden Klasse in England <1855>)』の出版に向けて文献研究も行っていただけからである。その後、エンゲルスはマンチェスターを去ってドイツに戻り、次に当時マルクスが滞在していたブリュッセルに移った。それでは、マルクスとエンゲルスは、なぜ1845年にわざわざマンチェスターまでやって来て、チータムズ・ライブラリーで協働作業を行わなければならなかったのでしょうか。そこに至る経緯は、マンチェスターの民衆史研究家であるフロウ夫妻が、丁寧な調査によって明らかにしてくれている⁽²¹⁾。

フロウ夫妻によると、1845年、エンゲルスは私的な理由でマンチェスターを訪問しなければならなかったが、当時ベルギーに亡命中のマルクスは、ポリ

ティカル・エコノミーの本格的な研究を行う為に、またチャーチストの先進的な運動に触れる為に是非イギリスに行かなければならないと考えていた。このような理由で、1845年の夏、両者は6週間のイギリス旅行を行い、主にエンゲルスが勝手を知っているマンチェスターに滞在した。当時のマルクスはほとんど英語を話すことができなかったため、英語を含めて数カ国語を自由に操ることができるエンゲルスとともに行動する必要があった。両者は、チータムズ・ライブラリーのリーディング・ルーム内アルコーブのデスクに終日陣取り、ポリティカル・エコノミーの研究のために使える文献の研究に没頭した。その時、両者はトーマス・ジョーンズ⁽²²⁾という着任したばかりの司書の助けを借りながら、次のような文献の研究を行った。

- ・ D'Avenant, 1704, *Essays Upon Peace at Home and Abroad.*
- ・ Petty, William, 1699, *Several Essays in Political Arithmetick.*
- ・ Gisborne, Thomas, 1795, *Inquiry into the Duties of Men in the Higher Ranks and Middle Classes of Society in Great Britain.*
- ・ McCulloch, John Ramsey, 1845, *The Literature of Political Economy.*
- ・ Eden, Sir F. Morten, 1797, *The State of The Poor.*
- ・ Aitken, John, 1795, *Description of The Country from Thirty to Forty Miles round Manchester.*
- ・ Macpherson, David, 1805, *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries and Navigation (4 vols).*

6週間のイギリス滞在を終えた後、両者はベルギーに戻っていった。このとき、エンゲルスは、パートナーのメアリー・バーンズをブリュッセルに連れて行った。その後の両者は、1849年のマルクスのイギリス亡命まで、ヨーロッパ大陸の革命の嵐の中で苦闘することになる。チータムズ・ライブラリーでの研究成果はすぐに2冊の書物に結実した。1つは、唯物論的哲学書としての再検討が近年進められている『ドイツ・イデオロギー (Die Deutsche Ideologie)』であり、もう1つは、ピエール・ジョセフ・プルードンの『貧困の哲学 (Misère de la Philosophie)』を風刺的に批判した『哲学の貧困』である。ところで、マ



写真12 マルクスのデスク
(後方のアルコーブ内の人物が座っている場所でマルクスは仕事をした)

ルクスとエンゲルスは1845年の夏以外に、チータムズ・ライブラリーで研究をおこなったことがあるのであろうか。この点に関して分かっていることは、1870年にエンゲルスが、チータムズ・ライブラリーを利用したということである。エンゲルスは、同年、マルクスに宛てて次のような手紙を送っている⁽²³⁾。

過去数日間、私は、再びアルコーブのあの四角いデスクに座ってかなり長い時間を過ごしています。私たちが24年前に一緒に座っていた処です。私は、この場所を大変気に入っています。スタンドグラスの窓が、そこでは天気がいとも素晴らしくなることを保証してくれているからです。司書のオールド・ジョンは、まだ生きていますが、彼は非常に年を取り、もはや活動的ではありません。今回は、まだ彼に会っていませんが。



写真13 エンゲルスの工場

以上の手紙から、1845年以後、両者が揃ってチータムズ・ライブラリーで協働作業を行ったことはないことが伺われる。しかしながら、マルクスは、1849年に家族と共にロンドンに亡命した後も、極めて頻繁にマンチェスターを訪問している。フロウ夫妻は、エンゲルスが1850年にマンチェスターに戻ってそこに定住してから20年間の間に、マルクスは、少なくとも20回マンチェスターを訪問しているという。このような頻繁な訪問が可能であったのは、1つには1850年代半ばの鉄道技術革新（マルクスは、午後2時にロンドンを出発し午後7時にマンチェスターのヴィクトリア駅に到着するグレート・ノーザン号を利用していた）の賜物であろう⁽²⁴⁾。マルクスのマンチェスター訪問の主要な目的は、①エンゲルスと議論し、協働作業を進めること、②当地でグンペルト医師の診察を受けて頻発する健康問題を軽減すること、③ロンドンでの生活の気苦労や疲れから逃れることの3つであり、特に③が重要であったという⁽²⁵⁾。1852年5

月、エンゲルスはマルクスに、「マンチェスターに来てホリデイを過ごすという案はどうか、天気が良ければマン島に旅することもできるし、悪ければ協働作業もできる」という趣旨の手紙を送っている。この誘いによって、マルクスは実際に5月にマンチェスターを訪問しているが、その時の宿泊場所は、おそらくストレンジウェイのグレート・ドゥーシー・ストリート70番地であったと見られている⁽²⁶⁾。そうであれば、マルクスの宿泊場所からチータムズ・ライブラリーまでは、歩いて僅か数分であるので、エンゲルスがビジネスに携わっている間に、マルクスが単独でチータムズ・ライブラリーに出かけて仕事をした可能性が極めて高いことになる。いずれにしても、1852年のこの時期の協働作業が、同年6月に出された、キンケルなどロンドンのドイツ人亡命者を批判した書（*The Great Men of the Exile*）に結びついたことは間違いなさであろう。さらに言えば、マルクスは少なくとも20回はマンチェスターに来ているので、その他の時期についても、同様の推測が成り立つであろう。

おわりに

これまで述べてきたところから明らかなように、チータムズ・ライブラリーは、図書館として引き続き重要な役割を果たし続けているのであるが、同時に近年、民衆史、稀覯本、バラード、チャップブック（chapbook）など特定のテーマに強い拘りをもつ観光客の間では、ニッチな観光地として、チータムズ・ライブラリーが静かな人気を呼んでいる。ところで、世界的な人気を誇るマンチェスター・ユナイテッドのホームスタジアムであるオールド・トラフフォードや国立サッカー博物館を始めとして、マンチェスターには数多くの人気観光地があるが、これらのマス・ツーリズムの観光目的地と比較して、観光地としてのチータムズ・ライブラリーはどのような特質を有しているのだろうか。最後に、観光地表象の「構築性」という観点から、この問題の一端を明らかにしておきたい。

観光地、とりわけ遺産観光地は、様々なステークホルダーの利害の絡み合い

を通して形成された意味構築物である。そして、この意味構築物の明瞭に識別できる形態が、当該観光地についての「語り」である。「語り」は、それが終われば消滅してしまうものではない。C. K. リースマンが述べているように、「語り」は、「他のコミュニケーションの様式が達成できないような社会的相互作用上の効果を持っている、そしてユヴァル・デイヴィスがこの点を敷衍しているように、アイデンティティは、語りであり、人々が自分自身や他者に向かって自分が誰であるのかそして誰でないのかについて述べる物語」なのである。ところが、「アイデンティティは流動的」であり、「いつも存在 (being) と変成 (becoming)、帰属 (belonging) と帰属願望 (longing to belong) の連結過程を通して自己を生産し続けている」ので、「この2重性がアイデンティティの語りのなかにしばしば反映されることになる」のだという。このような視点から見ると、英国L市とS市の生活協同組合主催団体旅行の志向性の強い観光客は、ガイドが述べる「語り」の現場で存在と変成、帰属と帰属願望の間の振動を経験しながら、個人的あるいは集会的な投企を模索している人々であると見なすことができるであろう。この団体旅行客の中の数名と会話を交わした結果、これらの人々は英国社会の近年の右傾化 (rightward tilt) を心から案じており、協同組合運動が資本主義システムに今にも呑み込まれそうになっている事態を何とか回避するための手があり、特にオルタナティブ社会やオルタナティブ経済の可能性を探していると語ってくれた。その手がありが、ガイドの「語り」の中に出てくるキーワード～フランクリン、ラッドライト、ピータールー・マサカー、ロバート・オーウェン、オーウェナイト、チャーチスト、マルクス、エンゲルス～の何れであるのか、あるいは何れでもないのかは分からない。しかしながら、チータムズ・ライブラリーは、マス・ツーリズムの流れから外れたところに位置する、民衆史という特定テーマに関心をもつ人々にとって、未来への投企を探求する特別な観光空間であると明言することができる。

以上に述べたように、「語り」が、アイデンティティの振動を通して観光客の未来の投企行為に一定の効果を及ぼしていることは間違いないが、それでは、

意味構築体としての「語り」を生成する中心的モーメントは何であろうか。この点について、最も説得力があると思われる答えは、スチュワート・ホールによって提示されている⁽²⁷⁾。すなわち意味構築体の中心的モーメントは、表象に他ならない。それ故に、ホールにとって表象実践 (signifying practices) は、社会的、文化的、そしてとりわけ政治的に非常に大きな重要性をもつことになる。この表象実践の研究に関して、近年、エマ・ウォータートンとスティーブ・ワトソンによって新たな成果が生み出された。この両名は、意味構築の中心的モーメントが表象であるというスチュワート・ホールの基本線を継承しながら、表象一般ではなく、視覚表象こそが意味構築において決定的に重要であるという視点を強調している⁽²⁸⁾。

こういった両名の視点は、チータムズ・ライブラリーのような多くの遺産（お宝）を持っている観光空間の意味構築を考える場合、かなりの有効性をもっていると言えよう。というのは、先述した生協団体旅行客が最も強い関心を示していたのは、先ず見るからに古色蒼然とした中世建築物それ自体、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスが協働作業を行った閲覧室のステンドグラスの光が注ぎ込んでいたアルコーブ空間とその中のデスク、彼らが手に取ったタイトルも擦れている古い書物の現物、ピータールー・マサカーの凄惨な雰囲気伝える「マンチェスターでの最近の出来事」という画報の絵、オーウェナイトでありチャーチストであったジョン・ベントと先進的ジャーナリストであったジェームズ・テイラー・ステーションが学んだチータムズ・ホスピタルの建物など、訴求力の強い視覚表象であったからである。先の生協団体旅行客の人々の多くは、これらの対象物が有する「オリジナルでオーセンティックなモノの吸引力」に魅せられていた。ガイドもまたその点を強調していた。しかし、エリック・コーエンは、オーセンティックの概念に関して次のような注意を喚起している⁽²⁹⁾。

ここで提唱しているオーセンティシティ概念も、マッカネルのアプローチが内包していた顕在的かつ大きな矛盾を保存している。すなわち、如何なるサイト

も、一旦それがオーセンティックなものとして有徴化（すなわち粹取り）されると、その途端にオーセンティックであることを止めてしまうという矛盾である。ファン・デル・アベールも、マッカネルのザ・ツーリストへのコメントの中で、「一旦サイトがオーセンティックなものとして有徴化されると、それは、まさにその事実そのものによって、もはや完全にオーセンティックなものではなくなる」と述べている。オーセンティックは、不安定な状態である。その露見そのものがそれを弱めてしまうのである。

確かにオーセンティックの概念を厳密に「粹取り」されないサイトとして捉えると、すべての観光サイトはオーセンティックではなくなる。なぜならば、何らかの粹取りを行わない限り、観光サイトは絶対に出現しないからである。したがって、このような観点から見ると、チータムズ・ライブラリーの生協団体旅行者の「オーセンティックなモノの吸引力」という意識や経験は、単なる物象化的錯視に過ぎないと言えるだろう。しかしながら、こういった捉え方は、観光客の意識を「志向性」において捉える必要があるという視点を欠いている。オーセンティシティを本質主義的、内在実体主義的に考えてしまうと、脱出口の見つからない陥穽（物象化的錯視）に陥る。オーセンティシティを文化研究の有効な概念として活性化させるためには、主体の客体に対する志向性という関係論的な視点が必要である。起源、純粹性、原初性、誠実性などは、いずれもオーセンティシティの内在的な実体ではなく、主体の客体への志向性という関係の中に存在する属性として考えるべきであろう。このように考えるときに初めて、生協団体旅行者の「オーセンティシティ」への志向性が未来への投企と結びついていく道筋を見定めることができるのである。

最後に言及しておきたい点は、チータムズ・ライブラリーという空間が、資本蓄積との繋がりや痕跡を消去していない数少ない観光地であるという点である。マクドナルドは、観光地と資本蓄積の繋がりについて次のように述べている⁽³⁰⁾。

歴史あるいは遺産を売ることは、資本蓄積を妨げうるあらゆる繋がりから自由となったコモディティを条件としている。例えば、カルバン主義者プレスビテリアンの地方史を売る可能性は、その強調点が厳格さ、抑制、スピリチュアルな自由などに置かれているので、ほとんど有り得ないであろう。それ故に、遺産と観光地を売ることは、非常に選択的なビジネスなのである。そのビジネスは、自らが同化できないものは全て削除してしまうか、視覚的に除去してしまうのである。

かくして、ほとんどの観光地で資本蓄積の痕跡は、それがもともと存在していないかのように消去されてしまうのであるが、ニッチ観光空間としてのチータムズ・ライブラリーとその支持者は、わざわざその痕跡に言及し、それを印づけ、それを枠付ける努力を行っている。この点は、オールド・トラフフォード・スタジアムや国立サッカー博物館の対極に位置する希有な特質（物理的にも国立サッカー博物館とチータムズ・ライブラリーは百数十メートル離れて相対している）として注目に値するであろう。

注

- (1) こういった新旅行カテゴリーの中には、文化観光の他に、冒険観光、エコツーリズム、農場観光、フェスティバル観光、食べ物観光、遺産観光、科学観光、ワイン観光などが含まれていた。B. R. Higgins, "Tour Operator" in D. B. Weaver ed. *The Encyclopedia of Ecotourism*, Wallingford: CABI Publishing, P.537.
- (2) Smith, M. K., 2003, *Issues in Cultural Tourism Studies*, p. x
- (3) 同館の司書は、今や、M氏を含めて来館者と蔵書の媒介を行う本務の他に、「観光地」としてのチータムズ・ライブラリーを「観光客」に説明する仕事も兼務している。とはいえ、司書のこういったガイド的な仕事は、質問に対する応答に限定されており、それ以上の「サービス」を期待することはできない。
- (4) この語りは、L市生活協同組合団体旅行のガイドの語りをデジタル録音し、それをトランスクリプトしたものである。
- (5) About the House, Benjamin Franklin House
http://www.benjaminfranklinhouse.org/site/sections/about_house/default.htm
- (6) チータムズ・ライブラリーの司書M氏の話による。

- (7) チータムズ理事長は、チータムズ・ホスピタルとチータムズ・ライブラリーを統括する理事長で、ロッチデールの北北西に位置するスレイドバーン教区ハマートン所領を1661年に購入して以来、同所領を管理し、その収益をチータムズ・ライブラリーとチータムズ・ホスピタルの運営に当てるなどの重要な仕事を担ってきた (THE HAMERTON DEEDS AND PAPERS Chetham's Library E.2.9 p.i)
- (8) チータムズ・ライブラリー司書 M 氏の説明による。
- (9) L 市生活協同組合団体旅行のガイドの説明による。
- (10) Archibald Prentice, 1851, Historical sketches and personal recollections of Manchester. London: Charles Gilpin, P.160.
- (11) Martin Wainwright, Battle for the memory of Peterloo: Campaigners demand fitting tribute On the 188th anniversary of massacre, a call to celebrate forerunners of democracy The Guardian, Monday 13 August 2007.
- (12) 確かに、古いブルー・ブラックは、「軍によるその後の群衆の分散」に言及しているだけであり、死者・負傷者が出たか否かさえも明らかにしていない。
- (13) Kennedy, John, 1831, 'A Brief Memoir of Samuel Crompton, with a description of his Machine called the Mule, and of the subsequent improvement of the Machine by Others', Memoirs of the Lit. Phi. Society of Manchester, Second Ser. Vol.V. pp.342-343.
- (14) Thomas Percival, 1807, The Works, Literary, Moral and Medical of Thomas Percival, London, Vol.1, pp.CXCIX-CC.
- (15) この28名のパイオニアは、年齢において19歳から66才に亘り、職業も織工、仕立屋、製靴職人、木靴職人、指物師など多彩であった。
- (16) ロッチデール・パイオニア博物館学芸員 S 氏の話による。
- (17) ロッチデール・パイオニア博物館学芸員 S 氏による。
- (18) チータムズ・ライブラリーの司書 M 氏の話による。
- (19) エンゲルスとメアリー・バーンズが初めて出会った場所は、オーウェナイト・サイエンス・ホール (The Owenite Hall of Science) であった可能性が高いと見られている (Ruth Frow and Edmund Frow, 1995, Frederick Engels in Manchester, Working Class Movement Library, pp.7-8.)。
- (20) この時期のエンゲルスは、メアリー・バーンズ手引きによる調査の他に、キャンプフィールドにあったオーウェナイト・サイエンス・ホール (The Owenite Hall of Science) で多くの労働者に接し、チャーチスト運動のリーダーであったジョージ・ジュリアン・ハーニー (George Julian Harney) やジェイムズ・リーチ (James Leach), オーウェナイトのリーダーであったジョン・ワッツ (John Watts) などとも親交を結び多くの情報を得ていた。特にジョン・ワッツとの討論は、エンゲルスのポリティカル・エコノミーに関する知識を飛躍的に増大させ、その結果が、エンゲルスの初期の重要な著作『政治経済学批判要綱』にむすびついたという (Ruth Frow and Edmund Frow, 1985, Karl Marx in Manchester, Working Class Movement Library, p.7.)。

- (21) Ruth Frow and Edmund Frow, 1985, Karl Marx in Manchester, Working Class Movement Library, pp.7-8.
- (22) トーマス・ジョーンズ (1810~1875) は、オックスフォード大学ジーザス・カレッジ卒業後、1845年にチータムズ・ライブラリーの司書に就任し、就任直後にマルクスとエンゲルスに出会った。
- (23) Ruth Frow and Edmund Frow, 1985, op.cit., p.7.
- (24) ibid., p.18.
- (25) ibid., p.13.
- (26) ibid., p.14.
- (27) Stewart Hall, 1997, Representation : Cultural Representations and Signifying Practices の議論を参照。
- (28) Emma Waterton and Steve Watson, 2010, Culture, Heritage and Representation, Ashgate, p.1.
- (29) Erik Cohen 2012 'Authenticity' in Tourism Studies : Apres la Lutte, in Tej Vir Singh ed. Critical Debate in Tourism, Channel View Publications, P.252.
- (30) MacDonald, F.2002, 'The Scottish Highlands as Spectacle', in Simon Coleman and Mike Crang eds, Tourism between place and performance, pp.64-65.

〈引用文献〉

- Chetham's Library, THE HAMERTON DEEDS AND PAPERS Chetham's Library E.2.9.
- Cohen, Erik, 2012 'Authenticity' in Tourism Studies : Apres la Lutte, in Tej Vir Singh ed. Critical Debate in Tourism, Channel View Publications
- Frow, Ruth and Edmund Frow, 1985, Karl Marx in Manchester, Working Class Movement Library.
- Frow, Ruth and Edmund Frow, 1995, Frederick Engels in Manchester, Working Class Movement Library.
- Hall, Stewart, 1997, Representation : Cultural Representations and Signifying Practices, SAGE Publications.
- Higgins, B. R., "Tour Operator" in D. B. Weaver ed. The Encyclopedia of Ecotourism, Wallingford : CABI Publishing.
- Kennedy, John, 1831, 'A Brief Memoir of Samuel Crompton, with a description of his Machine called the Mule, and of the subsequent improvement of the Machine by Others', Memoirs of the Lit. Phi. Society of Manchester, Second Ser. Vol.V.
- MacDonald, F. 2002, 'The Scottish Highlands as Spectacle', in Simon Coleman and Mike Crang eds, Tourism between place and performance, Berghahn Books.
- Percival, Thomas, 1807, The Works, Literary, Moral and Medical of Thomas Percival, London, Vol.1.

Prentice, Archibald, 1851, *Historical sketches and personal recollections of Manchester*. London : Charles Gilpin.

Smith, M. K., 2003, *Issues in Cultural Tourism Studies*, Routledge.

Waterton, Emma and Steve Watson, 2010, *Culture, Heritage and Representation*, Ashgate.

Wainwright, Martin, 2007, *Battle for the memory of Peterloo : Campaigners demand fitting tribute on the 188th anniversary of massacre, a call to celebrate forerunners of democracy*, *The Guardian*, Monday 13 August.

Wroe, James, 1819, *The Manchester Observer*, 21st August.